公民館の図書室は　学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2023年（令和5年）9月5日
第724号

国立市中1－15－1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

〈図書室のつどい 参加者の感想〉

与那原恵（よなはら　けい）著
『琉球切手を旅する ～米軍施政下沖縄の二十七年～』に参加して

砂川 美和子

「沖縄から届く手紙に貼られた美しい切手は、東京に暮らす私たち家族と沖縄をつなぐ小さな扉だった」

講演会冒頭、ノンフィクション作家の与那原恵さんは、そう切り出した。与那原さんの言う「切手」とは「琉球切手」、すなわち、米軍施政下の沖縄で作られた切手のことだ。

南国の色鮮やかな植物や魚、琉球舞踊の踊り手、文化財、工芸品など、あらゆる〝沖縄〟が切手の図柄として表現されている。その特徴は絵柄だけではない。切手の額面が「B円」という米軍が発行した軍票、それがドルやセント表示に変化しながら、１９４８年7月から、日本本土復帰を翌月に控えた１９７２年４月まで２５９種（再刷含む）発行され、米軍による沖縄統治の時代を小さな切手が如実に物語っている。まさに、戦後の沖縄史を内包したものといえよう。切手の発行を担っていたのは米軍政府（のちの米国民政府）で、やがて琉球政府郵政庁の所管となったものの、切手の発行計画や図柄については米側が大きく介入した例も見られたという。それでも、切手の図柄を描いた沖縄の美術家は誇りを持って琉球・沖縄の魂をしたたかに注ぎ込んだ。切手は沖縄からの「言葉」をのせて海を渡り、日本本土に暮らす沖縄出身者や世界各地に移民した沖縄の人々へと届けられた。

与那原さんが琉球切手の「扉」を開いて、その奥へと旅したい、琉球切手をテーマに執筆したいという衝動に駆られたのは、他ならぬ先祖から紡がれてきた沖縄とのつながりによるものだ。父方は代々琉球王府に仕えた家系で、大正期に沖縄で生まれたご両親は那覇で出会ったのち、沖縄戦の前に上京、与那原さんは東京で生まれた。戦争が激化し、帰郷かなわぬまま、終戦を迎え、沖縄は米軍施政に置かれた。ご両親の故郷への思いが膨れ上がっていくなかで、何よりも楽しみにしていたのが沖縄から届く手紙。沖縄の記憶が呼びさまされるように、手紙が届くたびごとに思い出話を語ってくれたという。

与那原さんは沖縄の親族や琉球切手の制作に携わった関係者に取材を重ね、特殊な事情から生まれた琉球切手を軸に、戦後、米軍施政下で沖縄がたどってきた道のりや人物の物語を自身の記憶も織り交ぜてこの本に書き上げた。

普段はすっかり忘れているが、私は講演会のさなか、小学1年生のときの出来事をふと思い出した。沖縄出身の担任の先生が夏休みに沖縄に帰省した折、クラスの生徒一人ひとりに沖縄から絵葉書を送ってくれたことを。そのころは既に沖縄は本土復帰しており、琉球切手ではなかったが、首里城守礼門の絵葉書はどこか遠くから届いた贈り物のようで、子どもにとって大切な宝物となった。これが私の沖縄原体験だ。その26年後、沖縄に惹かれて移り住み、14年の歳月を沖縄の人々とともに過ごすことになろうとは。そして、沖縄在住時代に、沖縄の親友の師匠ともいえる与那原さんを知った。今、私は国立に暮らし、与那原さんと国立市公民館で邂逅（かいこう）するという、この世界にある「縁」というものを思った。

本土復帰を目前にした最後の琉球切手には「final issue（ファイナル・イシュー）」と記されており、他に例をみないため、それは切手収集家には確かに大変珍しい代物に違いない。ただ、それ以上に、沖縄の人にとっては、米軍施政の「終り」を宣言する深い文言が刻まれたといえる。与那原さんは沖縄からの「言葉」を届ける役割を担っていた小さな切手の大きな物語を紡いだ。「final issue」から51年を経た今、与那原さんが投げた「言葉」を今度は我々がしっかりと受け止める番が来ている。

（中央公論新社）

ブッククラブから

佐藤泰志著

『きみの鳥はうたえる』

―逃げた先の人生―

東（あずま） 健太郎

1．『きみの鳥はうたえる』について

約40年前の国立市を舞台にした作品です。21歳の僕、佐知子、静雄の男女3人の、貧乏な中での享楽的な青春と暴力を描いています。一見、一つの傘に三人入るという「三人傘」に象徴されるような、三角関係ではない男女の関係を軽やかに描いているようにも見えます。ところが、ラストでトーンが大きく変わり、小説は衝撃的な結末を迎えるのです。

最初の感想は、ふわふわした生活から急に現実が突きつけられるんだな、刑事事件を起こしてしまうのは中上健次の『枯木灘』みたいだな、というものでした。

読書サイトで他の感想を読むと、あのラストの事件はいらないのではと言う意見が目を惹き、芥川賞選評で丸谷才一も、「ただおしまひのはうは感心しない。人殺しなんか入れなくたつていいのに。佐藤さんは小説的な恰好をつけようとして、かへつて話のこしらへを荒つぽくしてしまつた。」と言っていたし、映画でもあの結末はカットされていたので、影響されてしまい、ブッククラブの発表でもあの結末はない方がよい、と主張しました。なお、他の参加者の意見は賛否相半ばでした。

この点について、大木志門講師の解説は意外な視点からのものでした。静雄は母親の問題から逃げ続けていたため、ああいう事件を引き起こした、いわば自業自得だというものです。確かに、同居している母を見捨てて家を出、働きもせず周囲に金を借りまくって享楽的な生活を送っている静雄が、母のことを語ったとしても心底心配しているとは思えません。とすると、本作は若者の享楽的な生き方を一見肯定的に捉えているようでありながら、実は倫理面から批判的に見ていると言えるでしょう。

まさに目から鱗の解釈であり、あの結末は必然だったのだと深く納得しました。優れた知見に触れて、自分のそれまでの見方が音を立てて崩れ落ちる瞬間が私は好きです。

2．他の小説および評伝について

他に2作読みました。1作目は短編集『大きなハードルと小さなハードル』。その中では自分の家族を描いた秀雄ものが素晴らしいです。頑固で気まぐれな秀雄と、翻弄される妻の光恵、娘の陽子が人生の時々に出くわす情景を秀逸なタッチで描き出し、味わいが深いです。

次に遺作となった『海炭市叙景』。架空の街、海炭市に生きる14歳の少年から70歳の女性まで、いろんな人物が遭遇する人生の一断面と哀歓が描かれます。登場人物は佐藤の分身から離れることができ、自由度が増し、より世界が広がったと思います。佐藤泰志の最高傑作でしょう。一作読むならこれです。

『狂伝　佐藤泰志　無垢と修羅』というハードカバー607Pの評伝を読みました。これは佐藤愛溢れる元毎日新聞記者中澤雄大氏が、地道に関係者へのインタビューを重ねて出来上がったもので、今後佐藤泰志研究をする際の第1級の資料になると思います。

ここで浮かび上がってくるのは佐藤の一刻（いっこく）さと無頼ぶりです。結婚しているのに、自分の周囲に魅力的な女性がいると、かまわず手を出そうとする。修羅場の連続で妻の喜美子さんはどれだけ苦労したことか。家では常に緊張を強いられていたので、佐藤が亡くなって妻、子どもともにホッとしたそうです。今再注目されて、「死んで花実が咲いた」と妻の喜美子さんは思っているそうですが、死んでからでもいい夫になったのなら良かったですね。

（河出文庫）

新着図書から

〈総記〉

月の本棚　清水美穂子（書肆梓）　019

〈哲学〉

動物がくれる力　大塚敦子（岩波書店）　146

東南アジアのイスラームを知るための64章　久志本裕子編著（明石書店）　167

小川さゆり、宗教２世　小川さゆり（小学館）　169

〈歴史〉

ロシアの二〇世紀　M. ホダルコフスキー（藤原書店）　238

知と奇でめぐる近世地誌　木越俊介（平凡社）　291

〈社会科学〉

日本近現代政治史　小笠原正道（ミネルヴァ書房）　312

ヨーロッパの極右　ジャン＝イヴ・カミュ（みすず書房）　312

世界の片隅で日本国憲法をたぐりよせる　大門正克（岩波書店）　323

学ぶことを選んだ少年たち　大江將貴（晃洋書房）　327

外国籍だと調停委員になれないの？　日本弁護士連合会編（生活書院）　327

国際人権法と憲法　近藤敦（明石書店）　329

ＮＡＴＯ〈北大西洋条約機構〉を知るための71章　広瀬佳一編著（明石書店）　329

華僑・華人を知るための52章　山下清海（明石書店）　334

おそるおそる育休　西靖（ミシマ社）　366

記録と記憶に見る女性たちと百年　岡真理（明石書店）　367お

「イクメン」を疑え！　関口洋平（集英社）　367せ

ジェンダー平等を実現する法と政治　辻村みよ子（花伝社）　367つ

貧困は自己責任か　高沢幸男（彩流社）　368

聴こえない母に訊きにいく　五十嵐大（柏書房）　369

震災を語り継ぐ　石井正己（三弥井書店）　369

災害〈後〉を生きる　李善姫編著（新泉社）　369

おひとりさまの逆襲　上野千鶴子（ビジネス社）　369

韓国・基地村の米軍「慰安婦」証言　金貞子（明石書店）　369

黙殺された被曝者の声　トリシャ・T・プリティキン（明石書店）　369

ＡＤＨＤの僕がグループホームを作ったら、モヤモヤに包まれた　山口政佳（明石書店）　369

モヤモヤのボランティア学　李永淑（昭和堂）　369

自閉症を語りなおす　大内雅登（新曜社）　373

イラスト版１０分で身につくネット・スマホの使い方　竹内和雄（合同出版）　375

生涯学習時代の成人教育学　渡邊洋子（明石書店）　379

世界の食卓から社会が見える　岡根谷実里（大和書房）　383

韓国－食の文化　延恩株（桜美林大学出版会）　383

日本は本当に戦争に備えるのですか？　岡野八代（大月書店）　392

〈自然科学〉

動物に「心」は必要か　渡辺茂（東京大学出版会）　481

〈文学〉

糸暦　小川糸（白泉社）　91お

コロナ漂流録　海堂尊（宝島社）　91か

くもをさがす　西加奈子（河出書房新社）　91に

行きつ戻りつ死ぬまで思案中　垣谷美雨（双葉社）　91か

台湾文学というプリフォニー　垂水千絵（岩波書店）　910

あたたかき日光　田中綾（北海道新聞社）　910み

マナートの娘たち　ディーマ・アルザヤット（東京創元社）　93ア

シベリアの森のなかで　シルヴァン・テッソン（みすず書房）　95テ

講座の詳細は公民館だより９月号をご覧ください。

〈関東大震災から 100 年〉

①学べる！防災スタンプラリー……９月23日（土・祝）

②いま、ふり返る関東大震災の記憶…10月８日（日）～

講座参考図書

＊もしもに役立つ、いつものモノ選び－防災グッズは備えず使う！　松永りえ（エムディエヌコーポレーション）

＊親子で学ぶ防災教室　災害食がわかる本　今泉マユ子（理論社）

＊全災害対応！子連れ防災BOOK－1223人の被災ママパパと作りました　ママプラグ（祥伝社）

＊震災復興はどう引き継がれたか－関東大震災・昭和三陸津波・東日本大震災　北原糸子（藤原書店）

＊震災と死者－東日本大震災・関東大震災・濃尾地震　北原糸子（筑摩書房）

＊帝都防衛－戦争・災害・テロ［歴史文化ライブラリー］(452)　土田宏成（吉川弘文館）

＊災害の日本近代史－大凶作、風水害、噴火、関東大震災と国際関係　土田宏成（中央公論新社）

図書室のつどい

死にそうだけど生きてます

講師 ヒオカ（ノンフィクションライター／作家）

地方の貧困家庭で育ち、中学校でいじめによる不登校を経験したヒオカさんは、独学で県下有数の進学校である公立高校、現役で難関の公立大学に進学しました。しかし、進学後も貧困は続き、新品の制服が買えない、教科書や参考書が買えない……など数々の苦労を重ねました。そうした自身の体験をメディアプラットフォーム「note」で公開した「私が〝普通〟と違った50のこと～貧困とは、選択肢が持てないということ～」が話題を呼び、会社員を経て、ライター業の道に進みました。

〝無いものにされる痛みに想像力を〟をモットーに、弱者の声を可視化し、貧困問題や格差に関する取材・執筆活動を行うヒオカさんに、ご自身の生い立ち、貧困問題、学校や社会で生きづらさを抱えた経験などのお話をしていただきます。貧困への理解を深め、生きづらさについて考える機会にしたいと思います。

〈ヒオカさんの本〉表題作（CCCメディアハウス）

とき　9月30日（土）
　　昼2時～4時
ところ　公民館　地下ホール
定　員　60名（申込先着順）
申込先　9月8日（金）朝9時～
　　公民館　☎（572）5141

〈私の本棚から　第6回〉

浅田次郎 著『流人道中記』

今村 三郎

この本は、2018年から2019年に読売新聞朝刊に連載されましたので、ご存じの方も多いでしょう。私は知人から紹介されて、読み始めました。上下2巻ですが、3日間通しで読み、時間を忘れました。上巻はユーモア小説を見るかのように一気に、そして下巻は法と死について、考えながらでした。

桜田門外の変で井伊大老が暗殺され、世の中が激動の時代を迎えようという江戸時代末期が舞台です。幕府の法を守る三奉行が、旗本が起こした不祥事を評定しています。姦通の罪を犯したという旗本・青山玄蕃に、老中は切腹を言い渡しました。しかしながら、この男は「腹は切りたくない」。前例のない問題に、論議が盛んにたたかわされますが、なかなか結論が出ません。

年長で知恵者の町奉行が、「厠にてふと思いつき申した。」と蝦夷松前藩への大名預かりを提案します。

玄蕃は護送人に選ばれた19歳の見習与力・石川乙次郎とともに、奥州街道を北へと歩んで行きます。「腹が減った、あんまを呼べ」と、口も態度も悪い玄蕃です。しかし道中、事情を抱えた人々を、先を見通す力とやさしさで、救ってゆきます。

一方、乙次郎は武芸にも学問にも優れていたので、足軽の次男坊でありながら、町奉行所の与力に婿養子に入ったのでした。実家にどうしようもない弟妹を抱えており、隠すのに大変です。婿養子先にも彼を迎えねばならぬ事情があります。義父は病気で、妻はまだ15歳です。祝言を挙げて、半年が経つのに、この娘が自分の女房だとはどうしても思えません。でも兄妹のようにかわいがり、旅の途中、長い手紙を送ります。

乙次郎にとって初めての関所を通るのに、三奉行の連署がある通行手形をさしだします。玄蕃は、かの弁慶のように、関所の役人に対応します。「貫禄といい気品といい、さすがは将軍家の御本陣を守護する騎馬武者である」。

なぜ玄蕃が姦通の罪をかぶったのか、また出生の秘密や親族、家来との関係など、次第に明らかにされてゆきます。

終始冷たい態度をとっていた、乙次郎も旅の最後には、「新御番士青山玄蕃頭様、ただいまご着到にござる。くれぐれも御無礼なきよう、（中略）御案内下されよ」。

この文を書き上げる間に、私にとっての青山玄蕃である、人生の大先輩が亡くなられました。最後まで信念を曲げないで、自分の道を進んで、逝かれた方でした。ご冥福を祈ります。合掌。

（中央公論新社）

くにたちブッククラブ

―記憶の欠片をひろい集めて―

川越宗一『熱 源』
（文春文庫）

講　師　内藤千珠子
（大妻女子大学・近現代日本語文学）
と　き　9月21日（木）
夜7時半～9時半
ところ　公民館　地下ホール
申込先　公民館　☎（572）5141

＊次回は10月12日（木）
村上春樹『女のいない男たち』
（文春文庫）です。